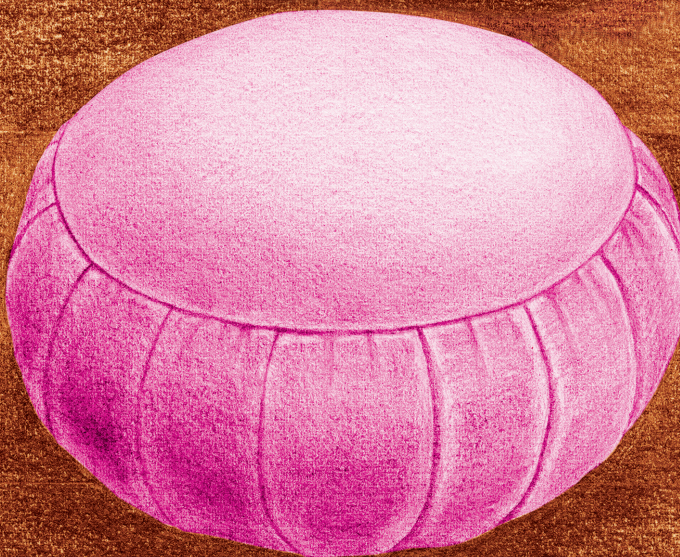
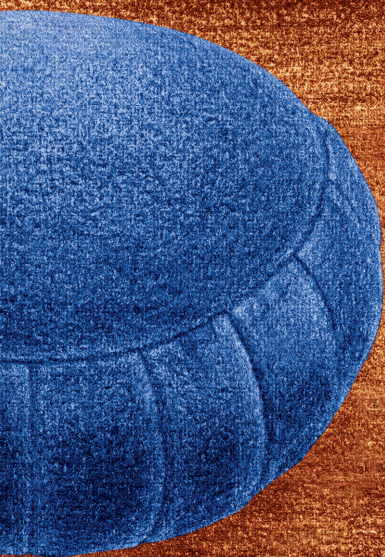
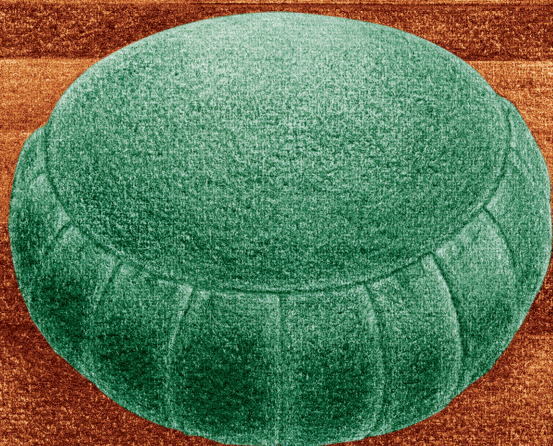


禅の友

—Zen no Tomo—

12

December 2022





ご本山だより 大本山永平寺 【諸行無常の鐘の音】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



令和四年も愈々暮れようとしています。一年三六五日、過ぎてみれば一場の夢幻の如くなりけりです。祇園精舎の鐘の音のみならず、永平寺で朝夕鳴り響く鐘からも諸行無常の響きが聞こえて参ります。

永平寺には山門前に総檜造の鐘楼堂があります。これは昭和三十八年に永平寺七十三世熊沢泰禅師さまの代に改築された鎌倉様式の鐘楼堂で、中に吊るされた梵鐘は口径一・五メートル、高さ三メートル、重さ五トンの大梵鐘です。

毎日「鐘点」という役の修行僧が早暁の暁鐘・昼の斎鐘・夕暮れ時の昏鐘・開枕を知らせる定鐘、そしてそのほかの特別な行事の際に撞きます。鐘を撞く際には、一撞ごとに「鳴鐘偈」という偈文をお唱えし、礼拝をします。その梵音は修行には欠かせないものとなっています。

仏道修行は「衆生の教体は音声を以てす」といわれ、一切衆生、仏道を志

すものは教えの本体として、鐘や太鼓の音、或いはお経の声を聞くことが大切とされます。これを梵音声ともいわれております。

道元禅師さまは

峯の色 谷の響きも 皆ながら 吾が
釈迦牟尼の 声と姿と

とお歌いになられました。この梵鐘の音もまたお釈迦さまのみ声であり、ご説法でございます。

また、『普勧坐禅儀』の「形質は草露の如く、運命は電光に似たり」のお示しでは、私たちのこの体は草の葉の露の如く儂く、命は雷の走るに似たものである、と教えておられます。

鐘楼堂から響き渡る梵音声を聞き、無常を観じ、目の前の修行に打ち込むことこそが、大切な辦道修行です。

大晦日にはこの鐘楼堂にて除夜の鐘を修行僧が交代で撞き鳴らします。

梵音声により年の瀬の永平寺が、一層静けさを深めます。



ご本山だより
大本山總持寺
【臘八摂心】

ろうはつせつしん

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一



早いもので、まもなく一年が終わろうとしていますが、今年もコロナ蔓延の中、自然災害が多発し難事に見舞われた年でありました。祈るは来年こそ平穩無事な年になることを願うばかりです。

十二月は年中行持ぎょうじの締めくくりである、臘八摂心ろうはつせつしんが修行されます。これは、お釈迦さまが六年間の苦行の末、村娘のスジャータから乳粥の施しを受け、苦行で疲れ切った身体を癒し菩提樹だいじゆ下で一週間の坐禅修行の結果、十二月八日暁の明星の輝きとともにお悟りを開かれたという故事にのっとり一日より八日未明まで修行されるものです。

摂心とは、まさに心を静かにおさめて坐禅三昧に徹することです。この期間では一切の日常の諸行持を中止し、

食事と講義以外は午前四時から午後九時まで僧堂で坐禅に打ち込むのです。

この臘八摂心は總持寺開祖・瑩山けいざん禅師さまの『清規じやうぎ』によって「臘月の長坐」として全国に広まっていった経緯があり、殊に大切な修行とされています。特に最終日七日目は深夜まで坐禅を続け、八日未明に至って「成道会じやうどうえ献粥けんじゆく諷經ふうきやう」がおこなわれます。

この行持が終わると本山では新年を迎える準備に入っていくのです。



成道会献粥諷經で
五味粥を頂戴する

選・坊城俊樹

精霊を送りし夜のみみず鳴く

山口県 御江 恭子

評「精霊送り」も季題だがこの句は「みみず鳴く」の季題が主季題と思うので季重なりではない。本当に蚯蚓は鳴くのかと言ったら鳴くことはなからう。ただ故人を偲ぶ夜には蚯蚓も鳴きそうな気もする。こんな素敵な空想もまた俳句には自由なのである。

閻魔より恐い奪衣婆冬隣

千葉県 長澤 さよみ

評 地獄の沙汰もなんとやらではないが、あまり行きたい所ではない。しかし閻魔さまは地獄の王なのだからそれなりの人格と理性はある。しかし奪衣婆は死者の衣服を分別もなくはぎ取るという老女の鬼。こんな恐い鬼に晩秋のころには殊に会いたくはない。

◆ 星月夜ボルダリングの突起物

埼玉県 伊藤 博

◆ 沈黙と云ふ静けさや水澄めり

秋田県 後藤 榮子

◆ 八千草の色を束ねて童子佛

大阪府 柏原 才子

◆ 築地松の枯れの間に今日の月

島根県 藤江 堯

◆ 亡き母に呉服屋からの夏見舞

埼玉県 熊谷 頼子

◆ のうぜんの花を掛けたし象の首

和歌山県 田崎 よし子

◆ ビル解体止めば夕焼け果てしなく

東京都 鈴木 英治

◆ 葉隠れに子規の顔見る糸瓜棚

三重県 西村 廣視

◆ 敵味方なく香を放つ菊人形

福島県 大槻 弘

◆ 虫の音の夜を更かしゆく窓辺かな

兵庫県 内藤 昭子

選者吟

空蟬の夢の中なる天の川

俊樹

作句小見 これは一種の誇大妄想のだが、極小と極大の取り合わせは俳句の世界ではままある。主季題は「空蟬」となるか。その小さな殻だけの命も夢を見るかも。そこに永遠の天の川が流れていたならなんと素敵であろう。そんな空想だらけの句なのである。

選・長澤 ちづ

戦争もコロナも人を数字にし夏から秋へ
季節が回る

大阪府 柏原 才子

【評】ロシアのウクライナ侵攻以来、戦死者の数が報道されるようになり一方、三年目となるコロナ禍も感染者や亡くなった人が数字として人々の話題に上る。作者は季節の巡りの中で、一人一人の個の尊厳について深く思いを巡らす。

アキアカネ胸の高さにホバリング聞いて
くれるか秋の心を

岐阜県 後藤 進

【評】赤とんぼは空中に留まっているような時がある。それが作者の胸の高さだったことから、少し感傷的になる作者である。秋の空気の透明感には、人にものを思わせる力が宿る。

◆「戦争は嫌だ」と言えばやまびこも「嫌だ」と答ふる秋の夕暮れ
福島県 大槻 弘

◆すこし泣きもう起きなくていいですと白寿の母に妹が言ふ
三重県 西村 廣視

◆たおやかな風船かづら夏過ぎて秘密をつつむやうな実つづる
北海道 菅原 三江水

◆整地され僅かに残る土塊に露草の芽の日毎伸びゆく
静岡県 高尾 善五

◆眠れざる夜を庭隅に蟋蟀がほそぼそ鳴きてもと思はしむ
鳥取県 徳本 義則

◆久々に祭の投げ餅拾う子ら精一杯の声マスクを抜ける
愛知県 深谷 ハネ子

◆延命はせぬまねごとと弔へと息らに告げたる八十の秋
群馬県 松本 さえ子

◆すぐ前の記憶が抜けることありて老いの哀しみ胸をよぎれる
山口県 濱田 道子

◆山間の門前町の夕間暮れたちまち虫の浄土となりぬ
埼玉県 白藤 巳玲

◆雲の間に入りてはいぎよふ月の影を更地のままの土は抱けり
岩手県 阿部 照子

選者詠

しろたえのマスク付ければお出かけと犬が
そわそわまとわりてくる

ちづ

【作歌小見】西村さんの一首は、白寿となられた母上を長く介護してきた妹さんの万感の思いがこもるようです。白藤さんの「虫の浄土」となる門前町の夕間暮れの情緒に強く惹かれました。過不足なく詠われとのった一首です。